



東京外国語大学教授 中嶋 崇雄



新しく国家安全相に就いた凌雲氏（前・公安次官）。
その活動に注目が集まる（中国通信社提供）。



“中国版KGB” の誕生

三月六月二日に開幕した
中国の全国人民代表大会（第
六期第一回）は、李先念・国
家主席、彭真・全人代常務委
員長を中心、空白の人事を埋め

て、国家レベルにおける非毛沢東化を印象づけた。しかし、一週間の人事は、昨秋の中国共産党二回大会の流れに沿ったもので、ほぼ予想通りであり、いわずに体裁を整えたにすぎないものでもあった。

これにひきかえ、今回の全人代が国家安全部(公)という新しい公安・治安機関を新設したことは、長期的に見て、きわめて重大な意味をもつ。それは、昨秋の中国共産党二回大会で書記処(公)の機能を書き加え、鄧小平・胡耀邦主導の党官僚独裁体制を固めた中国が、この公、中国版KGBを設立することによって、中国政治のメソ運化をはかりつつあるからだと見做すこともできよう。

した工作を一層効果的に指揮するため」だといわれ、前任の凌雲・国家安全相も同様のことを述べている。さらに、五月二十九日付「人民日報」は「社会治安に対して総合統治を果行したければならない」と懸念する重要社説を筆頭に掲げて「社会治安の総合統治」を強調し、国家安全省の新設を議論づけた。ここでは各部署を門ばらばらな従来の公安工作ではなく、「総合統治」によって「大衆が社会治安工作に関心をもち、参加するよう」にすべきだという一種の「六条路線」も示されている。やはり狙いは、単にスパイの摘発のみならず、相次ぐ亡命事件やハイジャック事件、反体制運動などの取締り強化や社会不安の抑制にあると見てとれらるであろう。

しかし、これらの点を踏まえておれば、従来の公安省や人民解放軍総政治部(保衛部)は、本年になって新設された人民武装警察部隊、さらには、中国社会主義青年団(共青團)（都市）、社会労働青年団(

こいつを頼り目のもうたまたま、幾層、治安組織で十分に対処可能なはずである。

それだけに国家安全省の新設は、ソ連のKGB(国家保安委員会)のような情報工作をいかに中国が国外に誇っても本格的に実行しようとしていると見てよいであろう。

このところ、アメリカなどの西側諸国へ留学した学生のおいでで活発な反体制組織「北京の春」の取締りなども、当然対象になるのではないかと、もうひとつの理由は、従来の中国の公安系統は、派生、謝富治、汪東興、華國鋒らが運ってきたことに示されるように、いわば毛沢東グループに属するものであり、鄧小平・胡耀邦らの旧楽隊派は、甚盛を欠いていたことである。

この点でも、国家安全省の新設は必要であったといえようが、この新しい機関が、中国共産党対外連絡部、同中央調査部さらには党中央弁公室といった、党の公安機関とどう関連するのかわからない。注目すべき点といえよう。